

東京経済大学 3 学部英語プログラムに関する考察

——発展英語教育の更なる進化を目指して——

関 昭 典

Reflection on the Three Faculties English Curriculum at Tokyo

Keizai University

Towards Further Development of Educational Methods for Advanced

Level Learners of English

Akinori SEKI

Abstract

The purpose of this article is to reflect on the current Three Faculties (Economics, Business Administration, and Contemporary Law) English curriculum that was launched in 2006 at Tokyo Keizai University. Thanks to the efforts of all the staffs who have been involved in the program, English education under the new curriculum has gradually stabilized, and is currently undergoing further development. The author will propose more matured educational methods for facilitating English proficiency of relatively advanced level learners of English at this university. Specifically, the importance of improving the students' English communicative competence, cross-cultural literacy and autonomous English learning competence is emphasized.

1. はじめに

急速にグローバル化が進む現代、世界共通語としての英語の必要性が高まり、本学の建学理念である「国際舞台で活躍できる人材の育成」の重要度も益々増大している。しかし一方、大学の大衆化に伴い、学生の学習意欲の全体的な低下や学力差の拡大も看過できない状況となっている。そこで東京経済大学では、2004 年に「語学教育検討委員会」を設置して、英語教育の抜本的な改革を行い、経済学部、経営学部、現代法学部で連携を組み、「異文化との共生ができ、日本と世界の架け橋となる人材を輩出する」というビジョンの下、学生の動

機づけを喚起しつつ、グローバルコミュニケーション能力の育成を目指す新カリキュラム（以下、3 学部英語プログラム）を施行するに至った。

本プログラムでは、まず、旧カリキュラムにおいて 2 年間にわたって分散履修させていた 8 単位分の必修英語科目を 1 年次に集中させた。次に 1 年次の英語必修科目をプレイスメントテストで習熟度に応じて 3 レベルに分け、学生の英語力に応じた指導の体制を整えた。また、CALL や LMS (Learning Management System) を積極的に取り入れた科目（英語 e ラーニング）や、教師と個人面談を重ねながら諸問題について意見を構築し英語で発表することを目指す少人数制科目（英語プレゼンテーション）を他大学に先駆けて必修科目として導入し、授業内外で指導教員とインタラクティブに学習を進める環境を整備した。また英語指導資格を有する英語学習アドバイザーを常駐させ、授業外での個人英語学習の支援体制も強化した。また、2 年次以降も、学生自身の興味・関心や卒業後の進路に適した選択科目を受講できるよう正課カリキュラムを整備した。年に 2 回程度開催する 3 学部英語プログラムの FD 会議では、授業担当教員に対して、基礎力の訓練と並行して英語を学ぶ動機づけを高める工夫をし、個々の学生とのインタラクションを重視するよう繰り返し要請し、優れた実践者の授業を公開することとした。

関係教職員の先進的な英語教育理念と献身的な努力の末に誕生した本プログラムは、既に 3 年半が経過した。この間、常に課題を抱え紆余曲折を経ながらも、教職員、学生双方の地道な努力により、本プログラムはようやく安定し、少しずつ成果が出はじめている。特に基礎力強化を重視した 1 年次の必修基礎教育については、旧カリキュラムでの英語教育と比較して状況が大きく改善したという声がよく聞かれるようになった。

一方、新カリキュラム下での必修基礎教育などが功を奏し、英語力や学習意欲を高めた学生に対する発展教育（2 年次以降の選択コース、選択科目など）については、十分な検討ができずに今日に至っている。必修科目の安定化で手一杯だったという事情があるのは事実だが、「国際舞台で活躍できる人材の育成」を大学設立の理念として謳っているにも関わらず、「国際舞台」にようやく近づいた学生の力を伸ばし切れていない現実に直面しており、早急な対応が必要である。そこで、本稿では、3 学部英語プログラムにおける今後の発展英語教育の在り方について私見を述べる。具体的には英語の 4 技能（読む・書く・聞く・話す）の能力に留まらず、自ら英語の学びを進めていく自律的英語学習能力や、世界の人々と共生しながら地球上の諸問題に対応していける異文化リテラシーを養成する教育の重要性を議論する。

2. 3 学部英語教育プログラム策定の経緯

グローバル化が急速に進み、社会における実践的な英語コミュニケーション能力、他文化

間コミュニケーション能力の重要性が高まっている。一方、大学全入時代を迎えた昨今、学生の学力や学習意欲の多様化が進み、いずれの大学も早急な対応が迫られている。この状況を鑑み、本学では、2004年に学長の諮問機関として「語学教育検討委員会」を設置し、英語教育の抜本的な改革を開始した。本委員会では、多角的な視点から本学英語教育に関する議論が成され答申が示された。そこで提示された課題は大よそ以下の通りである。

課題1 学生の英語基礎力の低下、英語学習意欲の低下への対応の必要性

「高等学校段階までに習得すべき基礎学力が不十分な学生や、基本的な学習習慣が身につけていない学生への対応が必要である。」

課題2 学力差・学習意欲の差の拡大への対応（特に英語学習意欲の高い学生に対する対応の必要性）

「本学は建学以来英語教育を重視しているため、英語力の向上を強く意識して本学を選択した学生が少なくなく、これらの学生の要求に応える教育内容の構築が必要である。」

課題3 グローバル化に対応する英語発信能力と異文化理解促進の必要性

「筆記試験（資格試験を含む）では良い成績を残すにも関わらず、実際の場面での英語使用に困難を伴う学生への対応が必要である。」

課題4 自律的英語学習者の育成の必要性

「学生の英語力を向上させるためには自律的な学習を誘発することが必須であり、その仕組みを構築しなければならない。」

課題5 到達目標設定と成果点検の必要性

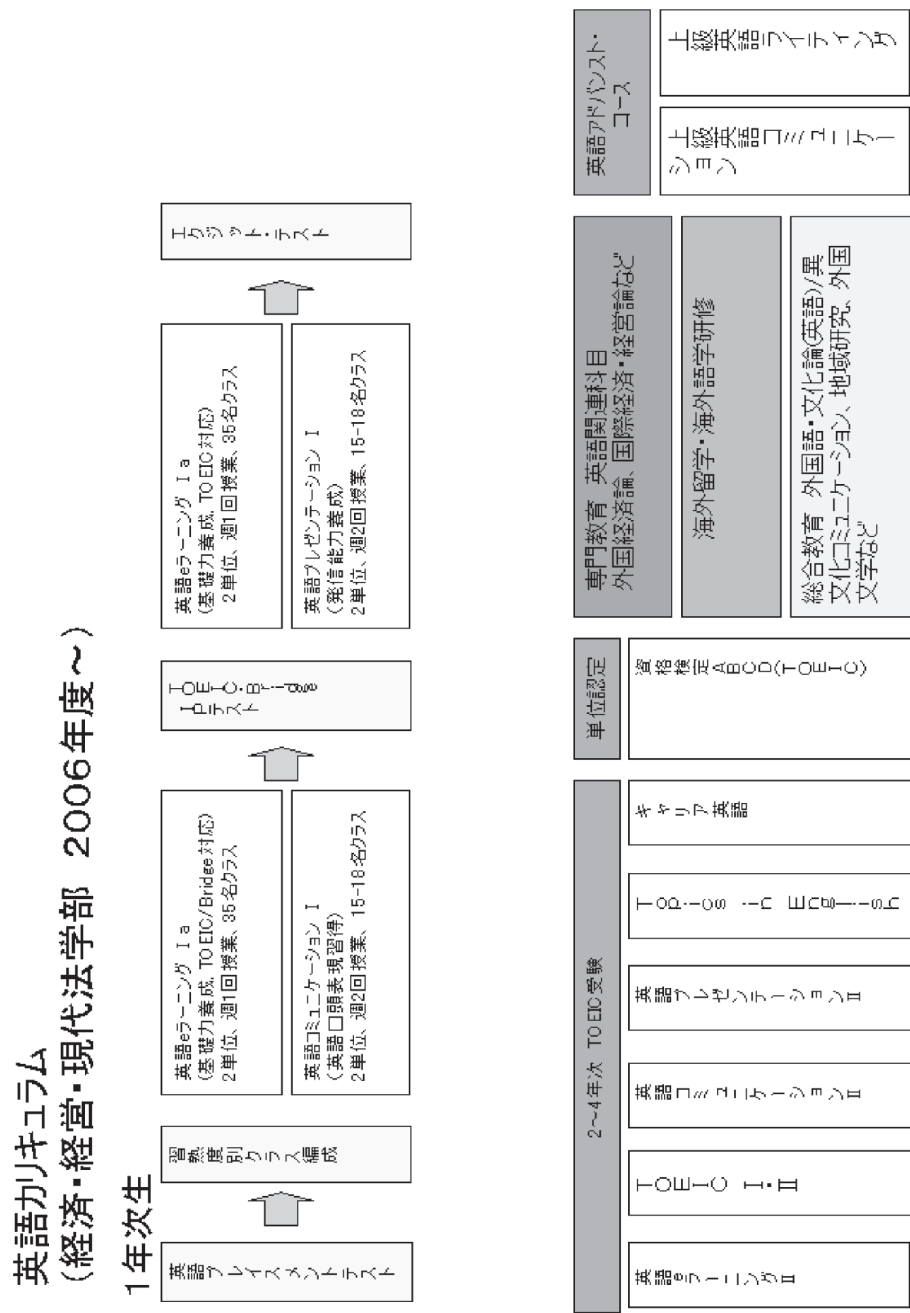
「具体的な教育到達目標を設定し成果を定期的に点検、改善することにより、教育の質を維持、向上させ、国際通用性のある英語教育を保証しなければならない。」

本答申で示された課題は本学に留まるものではなく、文部科学大臣の諮問機関である中央教育審議会が2008年に発表した「学士課程教育の構築に向けて」¹⁾や英語教育関連の学会、研究会等でも同様に指摘されている課題である。本学全学共通教育センターが「語学教育検討委員会」による答申を真摯に受け止め、大幅なカリキュラム改革を決意した判断は、時代の要請に応じた極めて妥当なものであったと言える。

3. 3 学部英語プログラムにおける具体的な取り組み

本英語プログラムのカリキュラムは図1の通りである。

1年次必修科目では約1300名の学生に対して、専任・非常勤合わせて総数55名の教員により「英語コミュニケーションⅠ、英語プレゼンテーションⅠ」をそれぞれ約160コマ、英語EラーニングⅠは前・後期合わせて約80コマを開講している。各科目の内容の詳細については、英語コミュニケーションは小田・土屋（2008）²⁾に、英語プレゼンテーションは藤



田他 (2009)³⁾、英語 E ラーニングについては、Seki & La Greca (2009)⁴⁾ に委ねることとする。

新カリキュラムの運用に当たっては、「語学教育検討委員会」答申によって対応を求められた課題を克服すべく、以下に例示するように様々な工夫を試みた。

課題1 学生の英語基礎力低下、英語学習意欲の低下への対応の必要性

取組1) 必修科目である「英語コミュニケーション」「英語プレゼンテーション」において、すべてのクラスを旧カリキュラムの半数 (15名～18名) の少人数制にし、さらに週2コマ制にすることによって、個々の学生に対する教員の指導が確実に行き届く環境を整えた。

取組2) 「英語 e ラーニング」では、通常授業に加えて学生が学習アドバイザーの支援を受けつつ、個々の学生のレベルに対応した e ラーニング教材に自主的に取り組む時間を設定した。また、e ラーニングに取り組む際に、単にコンピュータ画面と向き合う学習のみでは限界があると判断し、教材開発者の支援を受けながら本学独自の補助教材⁵⁾ を作成した。さらに Moodle を併用することにより、教員・学生間の授業内外でのインタラクションを活性化した。

取組3) 教育の質を維持、向上させるために、新プログラム導入に伴い全非常勤講師を再編成した。

取組4) 各期末に FD 会議を実施し、1 年次必修授業の最大の目的が英語学習の基礎の習得と英語学習への動機づけを再生させることにあることを強調し具体的な教育手法を提示した。

課題2 学力差・学習意欲の差の拡大への対応 (特に英語学習意欲の高い学生に対する対応の必要性)

取組1) 2 年次以降に英語学習意欲の高い学生を対象とした「英語アドバンストコース」を設置し、「上級英語コミュニケーション」「上級英語ライティング」などより高度なレベルの少人数制科目を配置した。

取組2) TOEIC で一定以上のスコアを取得した学生に対し、実践的英語活用能力の向上を目指して英会話学校「ベルリッツ」と提携した課外講座、「TKU ベルリッツプログラム」を開講し、受講費を大学が全額負担した。さらに取組開始後、今日に至るまで、継続的に効果の検証を行っている (表1)。

課題3 グローバル化に対応する英語発信能力と異文化理解の促進の必要性

取組) 少人数制の「英語プレゼンテーション」を必修科目に設け、個々の学習者が担当教員の個別指導を受けつつ、身の回りの諸問題について発信する指導を行った。

課題4 自律的英語学習者の育成の必要性

取組1) 学習目標を具体化させる支援の一環として、全学生を対象に TOEIC 及び TOEIC bridge の無料受験を制度化した (一年生は受検必修)。さらに TOEIC 受験の意図を周知す

TKUーベルリッツ・プログラム 受講者数・平均点 5年間の推移(2004～2008年度)														()内は600点以上の人数			
	クラス数	定員	1期(申込時4月)		1期末(7月)		2期(申込時9月)		2期末(12月)		TOEIC平均点の上昇幅		600点以上取得者実数(注1)				
			受講者数	平均点	受験者数	平均点	受講者数	平均点	受験者数	平均点	4月申込時→1期末	4月申込時→2期末	新規				
2008年度	6	90	83(16)	530.7	78(26)	546.2	76(25)	549.7	75(28)	573.8	15.5	43.1	42	24			
2007年度	7	105	95(11)	500.6	79(14)	513.1	97(14)	508.3	59(18)	576.9	12.5	76.3	24	13			
2006年度	6	90	84(9)	482.1	75(11)	493.7	84(11)	495.1	64(17)	537.3	11.6	55.2	22	11			
2005年度	6	90	89(11)	488.4	82(13)	489.2	—	—	49(11)	528.9	0.8	40.5	18	7			
2004年度	5	60	63(2)	466.6	58(6)	494.6	—	—	47(11)	542.9	28.0	76.3	14	12			
↑2期末(12月時点)																	
(注1) 600点以上取得者実数について																	
・本プログラムに所属し、一回以上600点以上を取得したことのある受講者の実数(申込時に600点以上取得している者を含む)。																	
・2004年度本プログラム開始時は2名。																	

表 1 TKUーベルリッツプログラム TOEIC 受験者数・平均点の推移 (2004～2008 年度)



May 15, 2009

E. T.



～The Extra-Tarminal (異星人)～

今日のポイント

- ★とにかく映画を楽しもう♪
- ★子どもたちと ET. の会話の英語に耳を傾けてみよう♪

キャスト



ET.



エリオット＆兄



妹

あらすじ

地球の生物探索のために訪れた UFO。地球人の追ってから逃れるために緊急着陸した際、一人の異星人が地上に取り残された。
自宅の裏庭で偶然出合った少年エリオットは、異星人を ET. と名付け、兄妹とともに ET. を自分の部屋にかくまい、仲間のもとへ帰る手伝いをする。
やがて ET. と兄妹のあいだには固い絆が結ばれるが……。

レビュー

☆時間があるときに全部通して観る（約 115 分）

☆以下のシーンを字幕なしで聞いてみる

（数字は DVD トラック番号、* は特にリスニング練習にお薦め）

- * 6：エリオット仮病の朝 [エリオットが ET. に物の名前を教えるところ]
- * 7：兄妹と ET. の出会い [クローゼットの中での子どもたちの会話]
- 8：地球儀と地図で場所を教える
- * 10：ET. が言葉を覚える [妹と ET. エリオットとの会話]
- 16：病室で [ET. とエリオットの会話]
- 17：ET. の死 [ET. とエリオットの会話]
- 19：宇宙からの迎えと最後の別れ

図 2 学習アドバイザーによるミニ講座のパンフレット

るために説明会を定期的実施した。

取組 2) 英語学習アドバイザーが常駐し、個人英語学習の支援を行うと共に、学習動機づけを喚起するミニ講座を多数開催した（図 2）⁶⁾。

以上の取組について 2006 年度末から 2007 年度にかけて「改革推進本部会議」において総括が行われた。そこで指摘されたことも踏まえながら、本プログラムの成果と課題を以下に述べる。

3. 本プログラムの成果——必修基礎教育の安定——

カリキュラム変更に伴い、当該学部の英語専任教員及び事務局担当者は、教育環境の整備、教員の再配置、学部専門科目との時間割の調整など様々な業務に忙殺されることになった。

加えて、新科目への対応や FD など加わり、多大な労力を費やすことになった。実は、筆者が本学に赴任したのは 2007 年 4 月、つまり、新プログラム施行後 1 年が経過してからのことである。それ以前の取組については、当時の資料及び新プログラムの構築を先導した教員からの聞き取り調査の結果に基づいて記す訳であるが、当時の関係者の苦労が計り知れないものであったことが強く伝わってきた。しかし、一連の改革と関係者の地道な取組により、学生に対する教育の質をある程度保証できたことは、寺地・野村（1997）による新プログラムの詳細報告⁷⁾や、小田・土屋（2009）、Seki & La Greca（2009）、藤田他（2009）などの成果報告などから明らかである。

また、本学には英語が不得意で学習に拒否感を持つ学生も少なくないことから、前述の通り、授業の少人数化や学習アドバイザー制度の導入になどより、教員と学生のインタラクションの活性化することを通じて、学生の英語学習観の変容を目指した。現在では、課外講座（TKU ベルリッツプログラム）の受講者を 90 名程度安定的に確保できるようになり、受講者の TOEIC スコアが確実に伸長した。専任英語学習アドバイザーへの相談件数も、増減を経ながらも増加傾向に転じた（表 2）。また、学生自ら外部講師を手配して、英語学習合宿を主催する意欲的な活動も見られるようになった。これらの進歩は本プログラムでの学習支援強化の成果であると考えられる。

表 2 英語学習アドバイザーへの相談件数の推移

(2007 年 4 月～2009 年 7 月)

2007 年度	7 年 4 月	〃 5 月	〃 6 月	〃 7 月	〃 10 月	〃 11 月	〃 12 月	8 年 1 月
相談件数	25	66	94	68	117	130	142	74
2008 年度	8 年 4 月	〃 5 月	〃 6 月	〃 7 月	〃 10 月	〃 11 月	〃 12 月	9 年 1 月
相談件数	40	39	73	66	53	66	27	73
2009 年度	9 年 4 月	〃 5 月	〃 6 月	〃 7 月	〃 10 月	〃 11 月		
相談件数	73	80	113	133	184	209		

4. 新カリキュラムの課題——発展教育の充実——

必修基礎教育については成果が見えつつある一方で、二年度以降の学生への発展的な英語教育については十分な対策が為されておらず課題が多い。本プログラムでは、2 年次以降にも多様な選択科目を配置した。TOEIC で一定のスコアを取得した学生を対象に「英語アドバンスコース」も設置した。さらには前出の課外講座（英語ベルリッツプログラム）も開

講するなど、応用的な学習の場を豊富に提供したのは事実である。しかし、これらの試みを全体として捉えた時、学生のレベルアップを確実にものとするシステムとして有効に機能しているとは必ずしも言えない状況にある。以下発展英語教育の課題を述べる。

(1) 異文化リテラシー教育

今や、英語は世界共通語であり、外国人同士及び異民族間の情報伝達的手段である。グローバル化が進む現代社会、国際舞台で活躍できる人材となるためには、英語圏に留まらず世界中の人々と英語で対等にコミュニケーションをとれなければならない。そのためには、英語のスキルに加え、異文化リテラシー、即ち、多文化環境で他者と協力し、世界の諸問題を解決していく能力を身につけなければならない。

1999年に告示された高等学校の学習指導要領⁸⁾には「英語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う」「英語を通して、外国の事情や異文化について理解を深めるとともに、異なる文化をもつ人々と積極的にコミュニケーションを図るための能力や態度の基礎を養う」(下線は筆者による)とある。これは、異文化リテラシー教育が、中等教育においても重要な国家的教育政策として取り組まれていることを示している。

しかし、筆者が本学で接する学生を観察する限り、中等教育における異文化リテラシー教育が十分に浸透しているとは考えにくい。筆者は本学において、アジア諸国での英語等研修に学生を引率し、現地での交流を定期的に観察している⁹⁾。また、留学生アドバイザー¹⁰⁾として、日本人学生と留学生との交流の支援にも携わっている。これらの活動を通して、日本人学生の、多文化の状況における対応の知識及び経験の不足を強く感じざるを得ない。言語能力の不足以前に、異文化の人々(たとえば、母語や人種、国籍の異なる人々)との接触自体にとまどい、心理的な壁を作ってしまうかのような行動をしばしば目撃するのである。

前項で列挙したこれまでの取組を見れば、とりわけ、この分野の教育が不足していることがわかる。今後、多文化社会に学生が自律的に対応できる資質を養成する指導の仕組みを構築しなければならない。

(2) 数値試験への依存

近年、TOEIC (Test of English for International Communication) など、英語コミュニケーション能力を数値で測定する試験が流行し、企業や大学等で幅広く活用されている。企業では昇進や就職の条件として、大学では入試出願、及び単位認定の条件として資格試験での一定レベルの成績を求めることも少なくない。本学においては、まず、必修科目「英語eラーニング」の単位取得の条件としてTOEICの受験を義務付けている。それとは別に、一定のスコアを取得した学生には単位認定をし¹¹⁾、特に高成績を修めた学生を表彰し奨学金を授与する制度¹²⁾もある。また、前述の通り、TOEICで400点以上を取得していない学生には

ベルリッツの歴史

Berlitzとは…

ベルリッツは、日本国内に約 80 のランゲージセンターを構える、「語学学校」です。中央線沿線では、立川や吉祥寺にもランゲージセンターがあり、英語を中心とした外国語会話のレッスンをこなしています。あまり聞きなれない方も多いかと思いますが、実はその歴史は古く、ベルリッツがアメリカにおいて設立されたのは、今から 135 年前にさかのぼります。現在では世界 60 カ国に展開し、全世界共通の教授法（ベルリッツ・メソッド）・教材で、世界中の人々が学習しています。



TKU—ベルリッツ・プログラム TOEICスコアアップコース 2008年度実績報告

★TOEIC600点以上取得者 42名!!

TOEIC800点台 7名
TOEIC700点台 10名
TOEIC600点台 25名
TOEIC500点台 32名

★1年間がんばり通せば、必ず結果はついてくる!!

得点アップの最高は295点!!
100点以上のアップが24名!!

		4月	7月		12月	
・経済2年	Mくん	460点	605点	→	755点	(295点アップ!!)
・国際2年	Hくん	410点	460点	→	680点	(270点アップ!!)
・経営4年	Oくん		630点	→	895点	(265点アップ!!)
・国際2年	Tくん	590点	650点	→	795点	(205点アップ!!)
・経済3年	Iくん	485点	655点	→	690点	(205点アップ!!)

せあ!! あなたもこのコースで
TOEIC800点突破を目指そう!!

図3 TKU ベルリッツプログラム宣伝用のパンフレット

発展英語プログラムを受講することを認めない仕組みとなっている。さらには、発展英語教育の成果として学生に提示される資料も図3のような TOEIC スコアの向上を示すもの以外には見当たらない。

Locke (1996)¹³⁾ は、個人にとって重要な意味を持ち、具体的で、実現可能な範囲で努力を要する目標が学習者の動機づけをより高めると指摘する。この視点で考えると、TOEIC 等の数値試験による目標設定は効果的である。つまり、結果が読解力、聴解力などスキル別に数値で示されるので大変具体的なのである。それだけでなく、高得点を取得することにより単位の認定や就職、昇進等にも繋がるので、学習者の重要な目標となり得る。したがって、活用次第では学習者の動機づけを高める有効な手立てとなり、実際、関 (2006)¹⁴⁾ など、数値試験を学習目標に据えた実践により成果を上げた例もある。

Seki & La Greca (2009) の学習実態調査によれば、英語を必要とする差し迫った理由は特になく、あいまいな気持ちで英語学習に取り組む学生が本プログラムの7割以上を占め

る¹⁵⁾。この状況下では、学生の関心事である就職活動につながる資格試験は、英語学習の具体的な目標設定の道具として教育者側には便利である。TOEICを必修化したのは、それを意図してのことでもある。

しかし、筆者は本学の英語教育において、数値を過度に強調することに危機感を持つ。なぜならば、本学に数多く入学してくる、英語が苦手な学生の劣等感に拍車をかけ、動機づけを再生させる障害となってしまうかねないからである。我々は高校での英語教育とは異なる手法で彼らの英語学習に対する意識変革を狙っている。しかし、彼らを褒め励ましつつ指導を行い、動機づけをようやく回復しつつある学生が、試験結果に愕然としてしまうケースを幾度となく見てきた。つまり、このTOEICの結果を見て自信を深める学生よりも落胆する学生の方が多いという現実を見逃してはいけない。

本来、数値試験は英語能力の一側面を測定しているに過ぎず、社会を見渡せば、数値試験でよい結果を残すことができずとも英語を使って活躍している人材は数え切れない。しかし、数値は具体的でわかりやすいので、学習者は、その結果に一喜一憂し、ともすると、そのスコアのみで自分の英語力を判断しがちである。教育者側はこの偏った学習観に歯止めかけ、真の英語力とは何かを学生に理解させ、数値のみに頼らない総合的な英語力を育成しなければいけないはずである。しかし、実際には、教育者集団も学生と一緒に数値試験の結果に右往左往する現象が各地で起こっているのである。本プログラムではそれを避けなければならない。

また、発展英語教育の入口を数値試験のみに限定する現在の手法（図4）は、「道具的動機づけ」つまり、英語を、就職を有利にするためなどの手段として学ぶ学生には響く。しかし、例えば、試験は苦手（きらい）だが英語での交流や異文化理解には興味があるといった、「統合的動機づけ」で英語力を高めようと意図している学生を取り込むことが難しくなってしまうので、必ずしも適切な手法とは言えない¹⁶⁾。

（3）英語教育関連会社との連携について

CALL（Computer Assisted Language Laboratory）システム開発会社や英語教材出版社は「よりインタラクティブな自律学習を可能にする」「導入校でTOEICスコアが大幅にアップ」「英語学習へのイメージを変える」など、それを活用すれば学習者の英語力も英語学習への意識も向上するというインパクトのある売り文句を並べて宣伝活動を繰り返す。近年、多くの大学が、その宣伝に乗り、多額の資金を投入してCALL環境を整え、eラーニングシステムなどを導入し、教材を購入してきた。また、「数値による資格試験の導入によって学生の学習動機づけが高まった」などという情報を得ると、多くの大学がその資格試験を導入、必修化し、それを目指す学習教材も販売数を伸ばしてきた。また、英語の授業自体を商品とする会社もあり、実際に外部の英会話学校の授業を学生に提供する大学も増えている。本学においても民間業者によるこれらの支援を積極的に受け入れている。

2009 年度 TKUーベルリッツ・プログラム講座概要

「TOEIC スコアアップ・コース」および「インテンシブ・コミュニケーション・コース」を開講します。

※この実施概要は、2009 年 3 月現在の予定です。変更となる場合もあります。

コース名	「TOEICスコアアップ・コース」	
講座の趣旨	TOEIC400点以上の学生を対象として、TOEIC600点以上を目指す特別講座。	
講師	ベルリッツのネイティブ・スピーカー	
対象学生	新規 TOEIC スコア 400点以上の本学学生 継続 TOEIC スコア 450点以上で、前年度の講座出席率 70%以上の本学学生 ※継続受講希望者のうち、上記条件に達しない者は、早めに学務課窓口に相談すること。	
開講方法	曜日時間 ※次の曜日時間で実施予定 ①月曜・木曜の5限(2クラス) ②月曜・木曜の6限(2クラス) ③水曜の3・4限(1クラス) クラス数 5 クラス(すべて通年クラス) 【他1クラスは日本人講師(アルク社) ※「日本人講師クラス講座概要」参照】 定 員 1クラス15名程度、合計 75 名程度	
授業期間 (通年)	I 期	授業 ①②5月7日～7月13日 ③5月13日～7月15日 各クラス計 20回 TOEICテスト 7月下旬(定期試験期間中の1日のみ実施)
	II 期	授業 ①②9月28日～12月17日 ③10月7日～12月9日 各クラス計 20回 TOEICテスト ①②12月21日 ③12月16日
受講料	受講料に相当する額を、大学より奨学金として支給する。教科書代 4100円 は個人負担。	
注意事項	・ガイダンスへの出席を受講の条件とする。 ・出席率が低い受講生は受講を取り消す場合がある。 ・授業期間中に再募集を行う場合がある。	

コース名	「インテンシブ・コミュニケーション・コース」	
講座の趣旨	英語による一般的コミュニケーションや国際ビジネスに必要なスキル。例えば、英語による会議の仕方やソーシャライジング・スキル(ビジネス マナー、ビジネスランチやパーティー での会話)などをアウトプット(発信)の観点から重点的に習得する集中プログラム。	
講師	ベルリッツのネイティブ・スピーカー	
対象学生	TOEIC スコア 600点以上の本学学生	
開講方法	日数 5日間(1日5時間) クラス数 1クラス 定 員 12 名程度	
授業期間	9月10日(木)、11日(金)、14日(月)～16日(水)	
受講料	受講料に相当する額を、大学より奨学金として支給する。	
注意事項	・ガイダンスへの出席を受講の条件とする。 ・4月の仮登録後、7月に本登録を行う。	

図 4 「TKU ベルリッツプログラム」、及び

東京経済大学
TOKYO KEIZAI UNIVERSITY

英語アドバンスト・コースの 申込みについて (申込書兼)

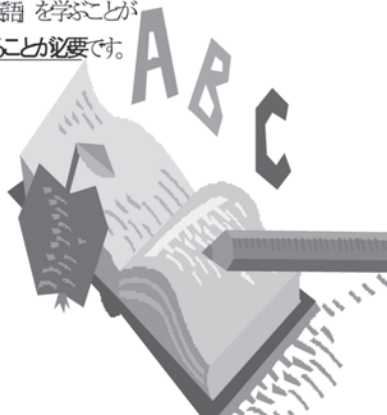
申込期間 11月25日～12月19日

申込場所 学務課

以下をよく読んで申し込むこと

必修の「英語」は1年次で終了ですが、2年次に、より高度な必修「英語」を学ぶことができます。それは2年次に「英語アドバンスト・コース」に所属することが必要です。

1年生必修各2単位 計8単位	英語 アドバンスト コース	2年生必修各1単位 計4単位
英語ラーニングIa		上級英語ライティングa
英語ラーニングIb		上級英語ライティングb
英語コミュニケーションI		上級英語コミュニケーションa
英語プレゼンテーションI		上級英語コミュニケーションb



申込みできる条件(以下のどちらかにあてはまること)

- ① 7月27日実施のTOEIC IPテストの結果が400点以上
- ② 7月27日実施のTOEIC Bridge IPテストの結果が140点以上

申込み方法

以下の申込み紙を切り取って、学務課まで提出してください。(提出ボックスを準備します)

申込期間

2008年11月25日(火)～12月19日(金) 9:00～19:45(土曜日は17:00まで)

注意事項

- ① 英語アドバンスト・コース所属学生は2年次に英語4単位が必修となります。(自由認定選択科目算入されます)
上級英語ライティングa/b、上級英語コミュニケーションa/bの4科目 各1単位 計4単位が必修です。
この科目を2年次に修得する必要があります。修得できなかった場合、3年次に降年修得する必要があります。
- ② 1年次必修英語8単位を修得できなかった学生は、申込み後でも自動的にコース所属が取り消されます。
- ③ 英語アドバンスト・コース 申込み後取り消すことができます。
- ④ 教員免許取得を考えている学生は「卒業と免許取得」の両方よく検討してから申し込んでください。
- ⑤ 本コースに所属すると、4単位必修増えることになります。休学・留学を考えている学生はよく検討してから申し込んでください。

「英語アドバンストプログラム」の講座概要

学生によりよい英語教育環境を提供することは非常に重要なことである。そのために、必要に応じて民間業者に支援を求めることは決して否定するものではなく、教育を推進するものであれば、むしろ積極的に導入すべきであると思う。ただし、導入に際しては、その対価、つまり、教育効果を事前に可能な限り予測しなければならない。1つの教育機器や教材が指導過程で果たせる役割など、実際はわずかなものに過ぎず、それを用いれば学生の英語力や英語学習観、英語学習意欲を変容できるなどという「魔法」のような物などがあるはずがない。個々の教員が自分の教授法や授業に上手く取り入れることができてこそ初めて成果があるのである。これは教育施策に関する極めて初歩的な知識である。しかし、現実には、他に打つ手が見つからず、業者の宣伝に縋って、十分な検証も経ずに多額なシステムや教材などを導入しまった結果、成果が上がらずの困り果てるケースが大変多いのである。学生の学習意欲の低下を目の当たりにする同志として、その行動を理解できないわけでもないが、同時に多少の軽率さも感じざるを得ない。

ましてや、「動機づけ」や「自律性」など心的要因の変容にまで踏み込んだ宣伝をする英語教材など怪しげにさえ思えてしまう。個人の心的要因を変容させるには、ひとの価値観や世界観にまで踏み込んだ指導が必要となる。これには大変高度な教育技術と手間を要し、正に現場の教育集団の力量が問われる領域である。もし、この領域をも民間業者に委ねるという意図があるとすれば、突き詰めれば学生教育の放棄にも繋がる大変憂慮すべき事態であり、我々は決してそうであってはならない。

教育においては、教師と学生両者の努力と協力、インタラクションが円滑に為されることが基本であり、それが欠けるとうまく機能しない。この基本的な事実を認識せずにいかに優れた教材や設備を投入しても、思うような成果を上げることは難しく、財政を圧迫するだけに終わってしまう。発展教育のみならず本プログラム全体に関して、今後このことを踏まえた対応が必要になると考える。

(4) 特任講師との連携

2006 年度より様々な取組を一時に数多く同時に開始してしまったために、3 学部英語プログラムの数少ない専任教員（2006 年は 4 名、2007 年は 5 名、2008 年は 4 名）の負担が過重になり、昼夜を問わず仕事に忙殺される結果となってしまった（そもそも、本プログラム自体、4～5 名の教員で管理できるような規模のものではないのではないか）。その結果、1 つ 1 つの取組の成果を点検し、各々を有機的に連携させる方策など考えるゆとりもなく現在に至ってしまった。とりわけ発展教育については手つかずの部分が少なくなく、今後の議論が必要である。

その際、特任講師のより積極的な運用を検討したい。本学では教育力に特に秀でた人材を特任講師として任用し（最大 5 年任期）、専任教員に準ずる立場で教育活動の運営に携わってもらふこととなっている。本プログラムにも 5 名の特任講師が配置されているが、いずれ

も大変有能な英語教育実践者であり、彼らの実践から学べることが大変多い。しかし、これまで、専任教員が仕事の忙殺されるあまり、特任講師との連携が少なく彼らの知識と経験を十分に活かす体制にはなかった。特任講師は真剣に本プログラムの発展を考え行動していたが、専任教員側にその意欲を受け止める意識と余裕が欠けていたのである。特任講師は非常勤講師とは異なり、自身の授業を充実することに加えて本プログラムを発展する組織的な取組に積極的に関与してもらうことが求められている。そのことは選考途中でも本人に周知していることである。今後は、これまで専任教員のみで対応しきれなかった業務、とりわけ具体的な英語教育の内容に関わる部分については、特任講師の活躍の場を増やすべきであると考え。

5. 発展英語教育の充実を目指す実践

これまで述べてきた通り、発展英語教育の充実こそが、本プログラムを進化させるための最重要課題であると筆者は考えている。初年度の必修教育によって生み出された学生の英語学習意欲の確固たる受け皿を作り教育効果を上げてこそ、本プログラムはより安定し、先進的なものとなる。そこで、以下に筆者の考える今後の発展教育の具体的な在り方を提案する。

5. 1 趣旨

3学部英語プログラムのが目指すビジョンである「異文化との共生ができ、日本と世界の架け橋となる人材を輩出」を実現することを目指し、現行の「英語アドバンストコース」をより魅力あるコースにする。

5. 2 教育目標¹⁷⁾

(1) 英語活用能力の養成

世界中の人々と、立ち向かうべき共通の課題について英語でコミュニケーションできる能力を養成する。他文化社会で他者と共生ができ、日本と世界の架け橋となるには、国際語としての英語でのメッセージを理解し、自らの意思を英語で的確に伝えることができないとできない。そのためには、当然、英語の4技能（読む・書く・聞く・話す）を意思疎通に事欠かないレベルまで引き上げることが必要となる。

(2) 異文化リテラシーの養成

従来の異文化理解の姿勢に立った多様な文化の体験と、それを通しての自己文化の相対的理解に加え、文化の違いを超えて人類が共有する様々な現代社会の課題に取り組み、共生のための解決策を探る思考力と行動力、コミュニケーション力を育成する¹⁸⁾。

(3) 自律的英語学習能力の養成

教師依存型の英語学習から脱却し、利用できる学習環境を最大限に活用して自ら学びを進めていくための能力を養成する。現在の日本の社会・教育環境下では、自律的にかつ継続的に学ぶ強い意欲がなければ、英語力を多文化社会で交流できるレベルまで引き上げることは困難である。

6. 英語アドバンストコースにおける具体的な取組の提案

6. 1 コース受講資格の多様化

現在は、TOEIC のスコアのみをコース受講の条件としているが、それを緩和し、学習意欲が高い学生、つまり、「英語を勉強したい」という気持ち強い学生も受け入れることとする。前述の通り、本学に入学してくる学生の中には英語が苦手な学生も多い。しかし、英語学習が不得意な学生たちが皆、英語への関心もないかというのではなく、英語を使えるようになりたい学生や、就職や進学のために英語学習が必要とする学生もいる。この類の学生にも受講のチャンスを与えることとする。そのために、本コース募集に当たっては、教員による面接選考を加え、本人の英語学習動機や学習意欲を確認した上で受講の可否を決定することとする。

6. 2 英語活用能力の強化

(1) 正課英語科目の充実

英語アドバンストコースの正課科目である「上級英語ライティング」「上級英語コミュニケーション」をより充実させる。これまでは、本コースの目的が必ずしも明確でなく、教員間での共通認識も十分に得られていなかった。聞き取り調査をしたところ、必修教育を担当する特任講師や非常勤講師の中にも、その存在すら知らない教員が少なくなかった。両科目の担当教員（これまで非常勤講師が担当していた）にさえも科目の意図や到達目標を明確にできなかった。今後本コースを発展させるためには、教員間で連携を密にしながら、本コースの柱となる正課科目を充実させなければならない。そこで、今後、正課科目はすべて、連携のとりやすい専任教員・特任講師が担当し、教員間で情報を共有しつつ指導を強化する。

(2) 課外講座（TKU ベルリッツプログラム）の位置づけの明確化

これまで、英語教員は、課外講座「TKU ベルリッツプログラム」の運営に積極的に関与して来なかったが、今後は、この課外講座を、「英語アドバンストコースの正課科目を補完する講座」とであると明確に位置付け、英語教員が中心となって運営し、正課科目と連動していく。

6. 3 異文化リテラシーの強化

(1) 海外研修の充実

本学では、費用の一部を大学が負担することなどにより、学生の短期・長期の海外研修へ参加を積極的に支援している。学内を見渡せば、イギリスの大学への長期・短期留学制度、オーストラリア、中国に4ヶ月間滞在する語学研修コース、韓国での語学研修、貧困・共生などをテーマとした研修、ゼミ単位での研修など、様々な形式での海外研修プログラムを実施している。これらの多様な海外研修プログラムに本コースの学生を積極的に参加させることにより、異文化リテラシーの向上を目指す。

例えば、ここ数年実施しているネパールやインドにおける研修（図5、図6）では、現地の一般家庭にホームステイをして学校にも通い、互いに第二言語（もしくは外国語）である英語で交流をする。多くの場合、現地の学生の英語力は本学の学生よりも数段勝っており、彼らとの交流により英語活用能力も確実に向上させることができる。また、開発途上国の一般学生・生徒が、限られた環境下で国際通用語である英語を必死に学び、自ら積極的に英語を使用しようとする姿に触れることにより、学生の英語学習観の変容も期待できる。

(2) 本学留学生との交流機会の拡大

本学では、留学生との交流にも力を入れている、その一例として、日本人学生と留学生とで共同運営する「国際交流チューター制度」（図7）がある。ここでは、学生の運営委員が定期的に会議を開催し、担当の教職員の助言を得つつ交流イベントを企画・運営している。2008年度は、バーベキュー、富士山登山ツアー、クリスマスパーティーなどの体験的な活動に加えて、本学21世紀教養プログラム主催の「多文化交流フォーラム」¹⁹⁾にも中心的に関わり、知識として多文化交流の在り方を学ぶイベントも試みた。今後は、この活動にも本コースの学生に積極的に関与させたい。

本学の留学生の多くはアジア圏の出身で十分な日本語能力を備えている²⁰⁾。したがって、日本人学生との交流言語は日本語であり、英語活用能力を訓練することはできない。しかしながら、異文化リテラシーの観点では学生の英語学習に貢献できる。つまり、背景の異なる様々な文化圏の人々と活動を共にし、交流を深めることにより、自らの価値観を相対化し、様々な文化と共生できる能力を高めていくことができる。さらに、日本語能力の限られている人々と日本語で交流することにより、ある言語を国際語として活用するときの言語調整能力（語彙、文法、話す速度など）や、言語的に優位な立場に立ったときのマナーも身につけることができ、それは英語学習にも通じるものがある。

(3) 異文化リテラシーの知識の習得

異文化リテラシーの養成には異文化経験だけでは限界があり、知識教育も重要となる。そこで、異文化リテラシーを高めることを目指す正課科目を新たに設置する。以下は筆者が提案したい科目の具体例である（図8）。

ネパール英語研修日程表

日付	訪問先・見学先・空港発着時間・便名など	滞在先
1日目	カトマンズ着	カトマンズ市内ホテル
2日目	バルハ県タンセンに移動、人権擁護団体、女性教育支援団体などとの交流	タンセン市内ホテル
3日目	専用車にてドリマラ村に移動、その後マイダン村に移動(徒歩1時間程度)	マイダン村ホームステイ
4日目	専用車にてドリマラ村に移動、その後マイダン村に移動(徒歩1時間程度)	マイダン村ホームステイ
5日目	チース村	チース村ホームステイ
6日目	リンネラハ村	リンネラハ村ホームステイ
7日目	リンネラハ村	リンネラハ村ホームステイ
8日目	リンネラハ村	リンネラハ村ホームステイ
9日目	ポカラ市にて大学生との交流	ポカラ市内ホテル
10日目	ポカラ市にて大学生との交流	ポカラ市内ホテル
11日目	ポカラ市にて観光 タワカトマンズに移動	カトマンズ市内ホテル
12日目	カトマンズ市内観光	カトマンズ市内ホテル
13日目	カトマンズ市内観光	カトマンズ市内ホテル
14日目	カトマンズ発	機内泊

ネパール現地での様子

図5 ネパール研修の概要

インド現地での様子

インド英語研修日程表

日 付	訪問先・見学先・空港発着時間・便など	滞在先
1日目	成田発、コルカタ着	ホームステイ
2日目	マザーハウスの登録へ 夜：英会話レッスン	ホームステイ
3日目	コルカタ市内観光 夜：英会話レッスン	ホームステイ
4日目	午前中：ボランティア活動 午後：学生交流会準備 夜：英会話レッスン	ホームステイ
5日目	午前中：ボランティア活動 午後：学生交流会準備	ホームステイ
6日目	午前中：ボランティア活動 午後：フリー	ホームステイ
7日目	現地学生との交流会（日本文化、インド文化の紹介）	ホームステイ
8日目	現地学生との交流会（グループ別エクスカーション）	ホームステイ
9日目	現地学生との交流会（グループ別エクスカーション）	ホームステイ
10日目	コルカタ発ー成田着	機内

※ ホームステイはすべて、コルカタ市内の英語が通じる一般家庭

マザーハウスとは

マザーテレサが現地の身寄りのない貧困層を救うために設立した施設。
世界中から集まるボランティアによって支えられている。

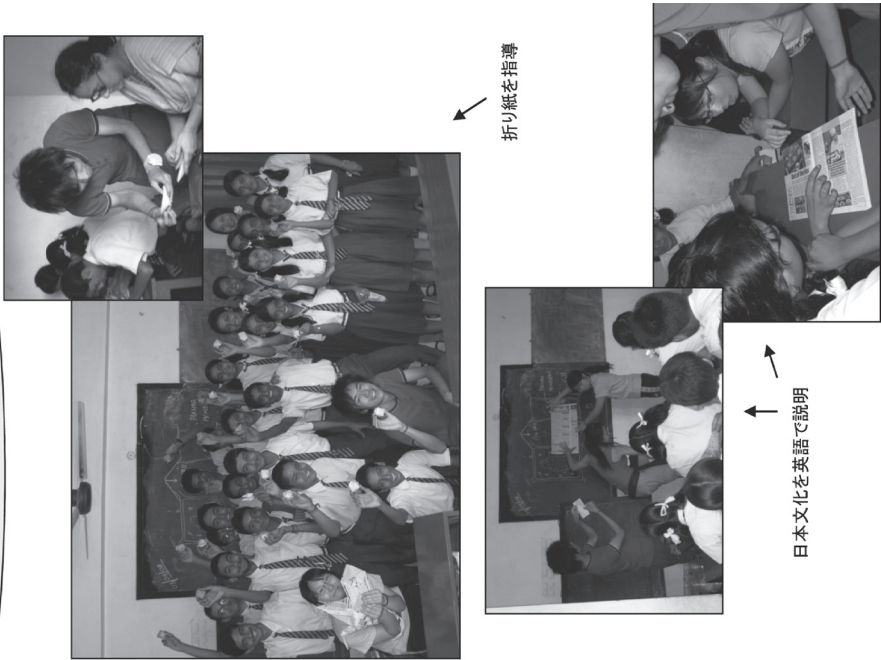
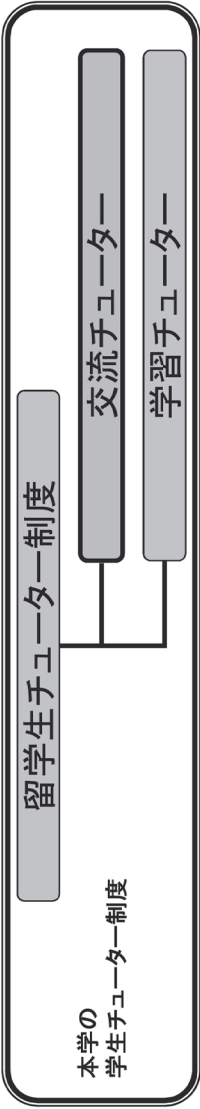


図6 インド研修の概要



交流チャーター

年間活動実績 2007年度

○外国人留学生交流企画

企画名	日 時	場 所
新入留学生歓迎会	4月3日	大会議室
チャーター企画1 「秋川パーベキユ大会」	6月3日	武蔵五日市秋川橋河川公園 パーベキユランド
チャーター企画2 「九十九里浜 1泊旅行」	7月28日 ～7月29日	千葉県山武郡九十九里浜
チャーター企画3 「鎌倉・江ノ島日帰り旅行」	11月25日	鎌倉、江ノ島
チャーター企画4 「英祭期間 韓国料理・中国料理出店」	11月 2日 ～11月4日	本学内

年間活動実績 2008年度

○外国人留学生交流企画

企画名	日 時	場 所
新入留学生歓迎会	4月3日	大会議室
チャーター企画1 「パーベキユ大会」	6月7日	武蔵野公園
チャーター企画2 「富士急ハイランド・富士山散策」	7月30日	富士急ハイランド 、富士山
チャーター企画3 「紅葉の溪谷美・昇仙峡/勝沼ツアー」	11月30日	山梨県
チャーター企画4 「英祭期間 各国の飲み物出店」	11月1日 ～11月3日	本学内

○国際交流フェスタ(12月15日)

外国人留学生による日本 語スピーチコンテスト	本学内	参加者：109名 (スピーチ発表留 学生19名、聴衆90名)
クリスマスパーティー	本学食堂 ホール	参加者：50名 (学生及び教職員)

○国際交流フェスタ(12月13日)

外国人留学生による日本 語スピーチコンテスト	本学内	参加者：50名 (スピーチ発表留 学生15名、聴衆35名)
クリスマスパーティー	本学食堂 ホール	参加者：50名 (学生及び教職員)

図 7 国際交流チャーターの取組の概要

①「異文化理解入門」(前期)

異文化環境で育った7名前後の講師がオブニバス形式で進める講座である。各講義から様々な異文化について学び、自分自身の文化と比較検討することでその違いについて理解する。また異文化間のコミュニケーションに関する諸問題を考察し、摩擦の問題や克服法についても考察する。

②「異文化理解実践」(後期)

「異文化理解入門」で学んだ内容をもとに、異文化交流・異文化理解を実践する。学生自らの手で「異文化フォーラム」を開催することを最終目標とする。

3学部英語プログラムでは、この分野に関する知見の深い専任教員が複数教鞭をとっている。その教員が主導することにより、異文化リテラシーと英語教育を融合させた画期的なコースの構築が期待できる。

6. 4 自律的英語学習能力

(1) 学習動機づけを高め、自律的な英語学習能力を養成するために、関(2006)が提案する「動機づけ重視の英語学習5段階モデル」(図9)に基づく指導を行うことを提案する。このモデルはDörnyei(2001)の動機づけの「過程志向モデル」²¹⁾を参考に、筆者が日本人大学生への指導の検証を重ねながら構築したモデルである。単に英語のスキルを教え込むのではなく、学生一人一人の英語を学ぶ目的や目標、学習スタイルを明確にし、それに合わせた学習プランニング法、学習ストラテジーを指導する。また、自己調整学習(Self-regulated learning)²²⁾、観察学習(Observational learning)²³⁾、協同学習(Cooperative learning)²⁴⁾など、学習者の動機づけや自律性を高める効果が指摘されている様々な形態の学習法を授業内外に取り入れていく。さらに、教員と学生、及び学生間のラポールを育み、学習アドバイザーなどによる支援体制も充実させることにより、学生の英語学習に対する不安を取り除き、安心して学習に取り組めるようにする。

(2) 個人英語学習カルテ(英語ポートフォリオシステム)を用いた学習アドバイス

英語学習に関わる個々の学生の情報(資格試験スコア、学習目標や学習スタイル、学習計画、学習記録、過去の実践履歴など)を一括管理するシステムを構築することにより、関係教員、学習アドバイザー、及び学生の間で情報を共有しながら、学習を進めていける仕組みを作る。具体的には図10が構築するシステムのイメージである。近年医療機関などで普及している電子カルテに近いもので、これまでは主に紙ベースで管理してきた学生の英語学習に関する情報を、すべてデータベース化する。このシステムを構築することにより、学習指導が効率化され、複数の教員で情報を共有しながら指導することができるようになる。基本的には専任学習アドバイザーが中心となって管理・助言を行い、必要に応じて教員からも追加指導を行う。

《科目名》s	異文化理解入門（多文化の世界）	1・2期・ 集中授業 各（2 ）単位
《英文科目名》	An introduction to Cross-cultural understanding	
《担当者》	未定	
《開講趣旨》		
全学共通教育センターの将来構想委員会の中間答申では、教養教育を「地球的視座をもち、批判的思考力を身につけた、よき市民」のための教育と位置づけているが、そのいずれもが言語能力と密接に関連している。「地球的視座」を獲得するひとつの道筋は外国語を通して広く世界を知ることであるし、「批判的思考力」の基盤は思考力と表裏一体の言語能力であり、「よき市民」として「国境や文化・性・年齢等の違いを超えてさまざまな人びとと積極的に相互理解を深める」ためには、外国語運用能力が有効であるとともに『異文化リテラシー』が必要である。英語プロフェッショナルプログラムでは、いわゆる『異文化リテラシー』能力の涵養を目的とし、相互依存関係・地球社会化・貧困・人権など、今日の複雑な社会のあり方を理解するための知識をもたせ、自らの価値観や現実社会の価値観を相対化できる力、自己調整力、文化や言語が異なる人々との間に境界をつくらずに建設的なやりとりができるような対人スキルの育成をねらう。その入門編である。		
《授業概要》		
異文化環境で育った7名前後のゲスト講師を招聘し、その体験談を中心にその様々な異文化について学び、自分自身の文化と比較検討することでその違いについて理解する。また異文化間のコミュニケーションに関する諸問題を考察し、摩擦等の問題を理解するとともに、克服法についても考察する。テーマは大別すると次の通り。 1) 文化とは？価値観とは？ 2) 自文化中心主義(Ethnocentrism) 3) 異文化適応 4) コミュニケーションと文化・言語 5) 言語によらないコミュニケーション 6) 異文化摩擦 7) 問題の解決 以上のテーマを系列的に扱わず、体験談等を通して横断的にあつかう。 また授業と関連して、CAPS (Intercultural Adjustment Potential Scale、異文化対応能力検定)、YOGA Form (Your Objectives, Guidelines, and Assessment Form) などの評価基準により、異文化に対する適応力の変化を確認する。		

《科目名》	異文化理解実践（フォーラムの開催）	1・2期・ 集中授業 各（2） 単位
《英文科目名》	A Seminar to Cross-cultural understanding	
《担当者》	未定	
《開講趣旨》		
全学共通教育センターの将来構想委員会の中間答申では、教養教育を「地球的視座をもち、批判的思考力を身につけた、よき市民」のための教育と位置づけているが、そのいずれもが言語能力と密接に関連している。「地球的視座」を獲得するひとつの道筋は外国語を通して広く世界を知ることであるし、「批判的思考力」の基盤は思考力と表裏一体の言語能力であり、「よき市民」として「国境や文化・性・年齢等の違いを超えてさまざまな人びとと積極的に相互理解を深める」ためには、外国語運用能力が有効であるとともに『異文化リテラシー』が必要である。英語プロフェッショナルプログラムでは、いわゆる『異文化リテラシー』能力の涵養を目的とし、相互依存関係・地球社会化・貧困・人権など、今日の複雑な社会のあり方を理解するための知識をもたせ、自らの価値観や現実社会の価値観を相対化できる力、自己調整力、文化や言語が異なる人々との間に境界をつくらずに建設的なやりとりができるような対人スキルの育成をねらう。その応用編である。		
《授業概要》		
「異文化理解入門」で学んだ内容をもとに、異文化交流・異文化理解を実践する。学生自らの手で「異文化フォーラム」を開催することを最終目標とする。		
1）異文化との交流： コリアン・タウン（新大久保・鶴見・枝川） インド人コミュニティ（江東区西葛西） ブラジル人コミュニティ（群馬県太田市大泉町） 訪問し、インタビューを行う。日本文化の中の異文化に焦点をあて、考察する。		
2）異文化トレーニング：方法と実践 自己評価テスト、事例研究、映像、シミュレーション・ゲーム等を理論と実践から学ぶ。		
3）フォーラムの開催：学生自身の手でフォーラムの企画・実施を行う。2011年1月実施予定		

図8 異文化リテラシーを高める新科目案（異文化理解入門・異文化理解実践）

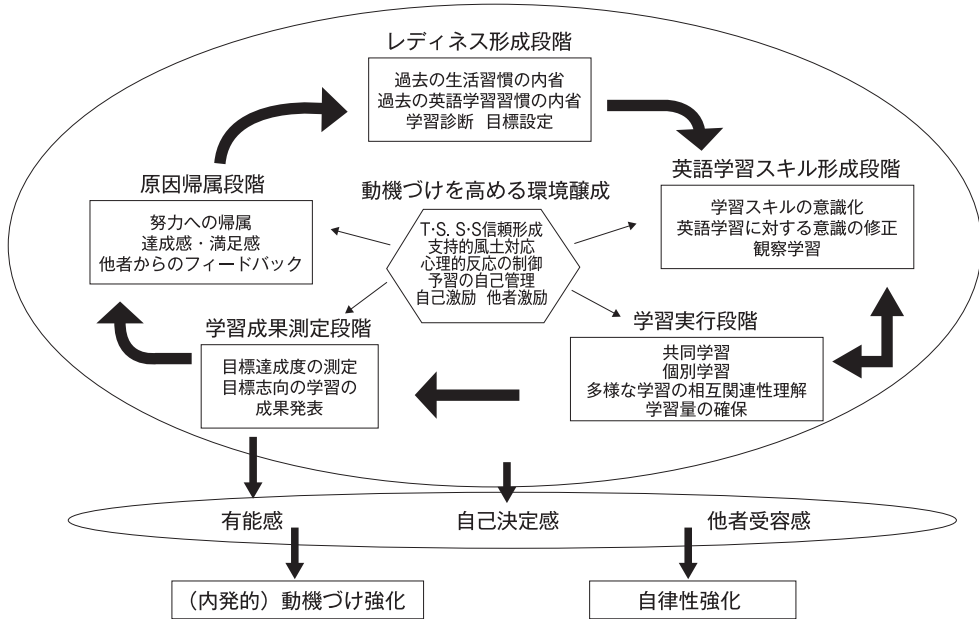


図 9 動機づけ重視の英語学習 5 段階モデル (関, 2006)

(3) 「英語セルフアクセスルーム」の設置

本プログラム生が、教員や ESAC (English Study Advisor's Certificate)²⁵⁾などの専門資格を有する英語学習アドバイザーの支援を受けながら個人英語学習に取り組む「英語セルフアクセスルーム」を設置する (図 11)。そこには E ラーニング教材や英語学習・異文化リテラシー関連の文献・映像教材を揃え、さらに遠隔授業や多文化交流をネット上で行なえるシステムを構築する。英語学習アドバイザーが管理をし、教員と連携をとりながら英語学習支援にあたる²⁶⁾。

6. 5 本プログラムの指導目標と評価

既に取り入れている資格試験などの数値での目標、評価に加え、実際の場面で英語を活用する能力や異文化リテラシー、自律的英語学習能力について、観点別評価を含めた質的な目標、評価を取り入れる。

(1) 英語活用能力

仮に基礎力が定着している学生 50 名が本プログラムを 2 年間受講する場合、過去 5 年間の TKU ベルリッツプログラム受講者の TOEIC スコアの数値や学生の海外語学研修などでのパフォーマンスなどから判断すると、業者試験を活用した場合の数値目標としては大よそ以下のレベルが妥当であろう。

- ① TOEIC 800 点以上 5 名程度, TOEIC 700 点 10 名程度

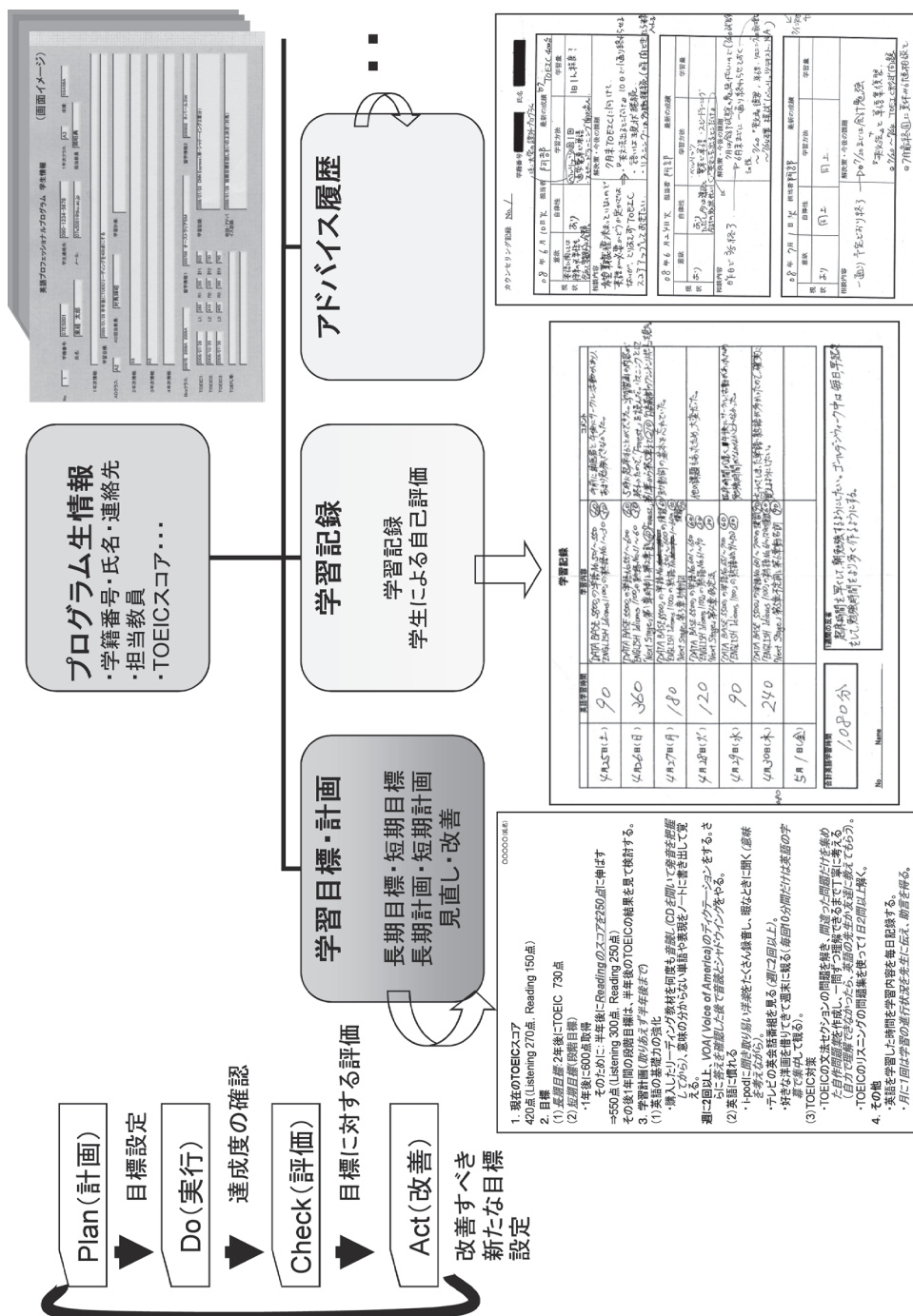


図10 個人英語学習のカルテのイメージ

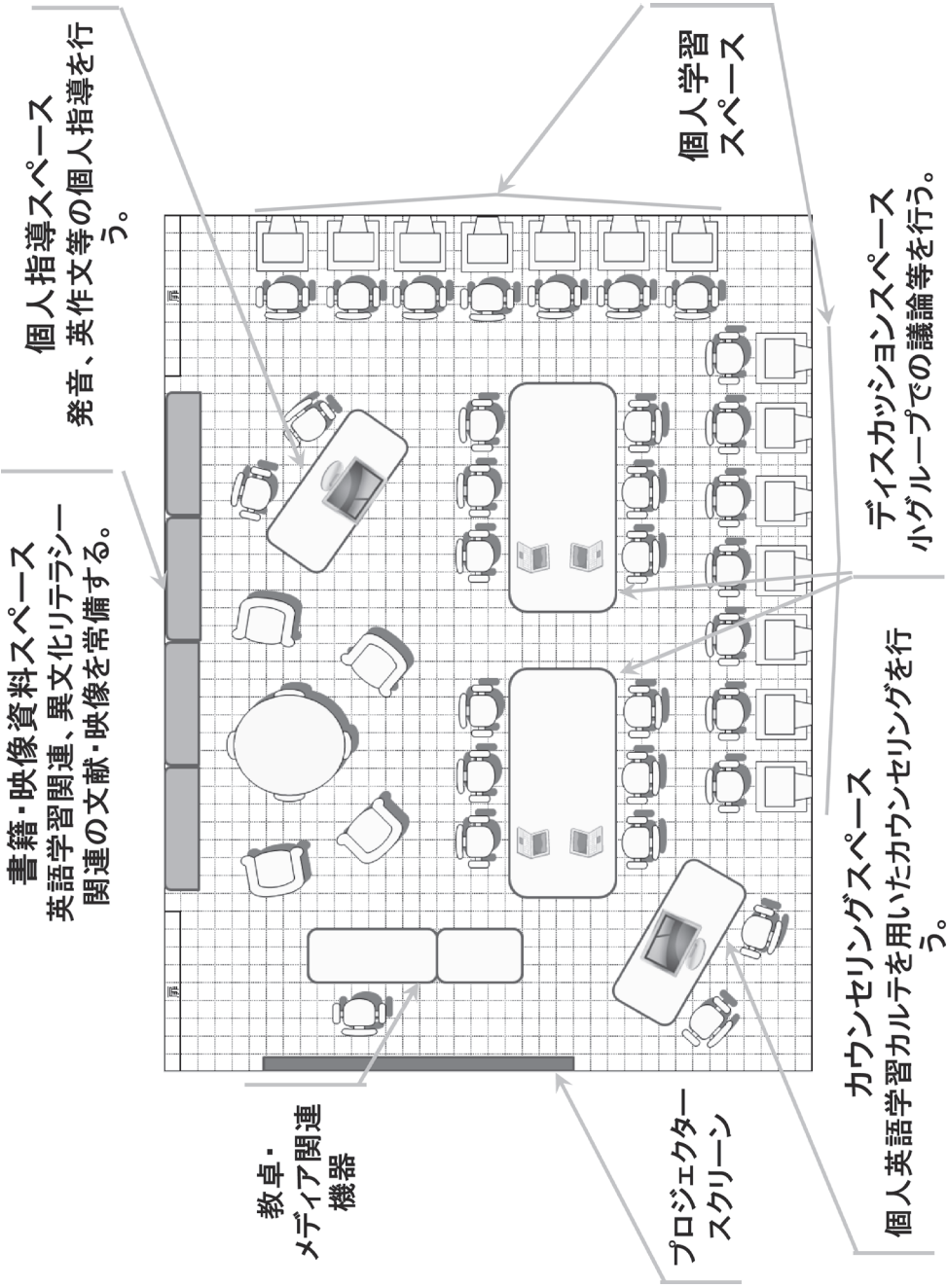


図 11 英語セルファクセルルームのイメージ図

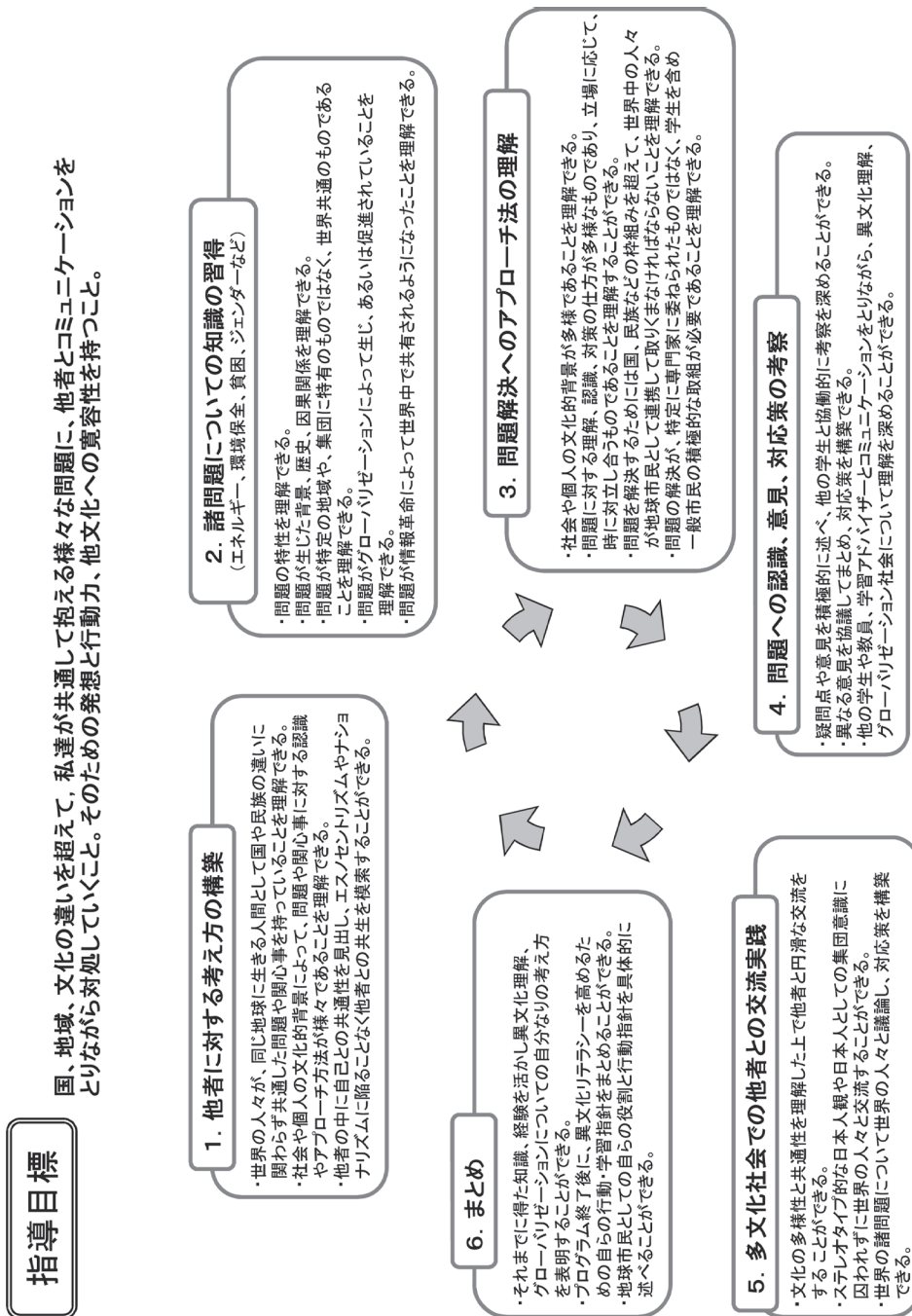


図12 異文化リテラシー教育の目標と観点別評価項目

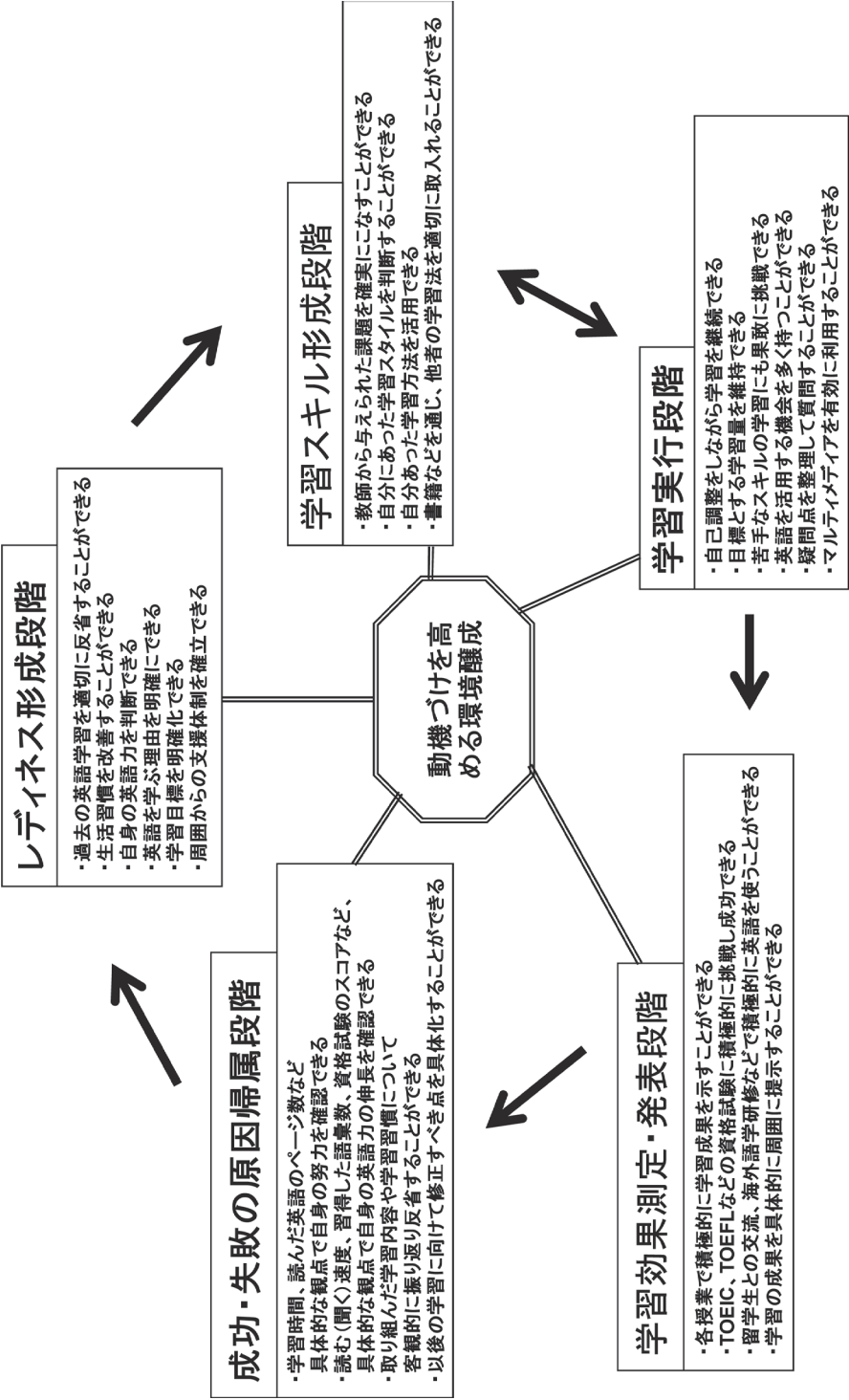


図 13 自律的英語学習能力を育成する教育の観点別評価項目

② TSST (Telephone Standard Speaking Test)²⁷⁾ Level 7, 5名程度。Level 6, 10名程度

但し、本学の場合、必ずしも外部業者に頼らずにも本プログラム受講者を評価するための仕組みや試験を自前で作成するのに十分なスタッフを備えていると考える。今後関係教員で検討を重ね、本プログラム独自の評価体制を構築できれば、なお望ましい。

(2) 「異文化リテラシー」

国、地域、文化の違いを超えて、我々が共通して抱える様々な問題に、他者とコミュニケーションをとりながら対処していくこと。そのための発想と行動力、他文化への寛容性を持つことを達成目標とする。そして、「他者に対する考え方の構築」「諸問題についての知識の習得」「問題解決へのアプローチの理解」「他文化社会での他者との交流実践」の各学習段階を学生が確実に歩んでいける指導を行い、図12の各観点に照らした評価を行っていく。具体的な評価手法については今後の検討課題である²⁸⁾。

(3) 「自律的英語学習能力」

図9の学習プロセスを学生が確実に歩んでいける指導を行い、図13の各観点に照らした評価を行う。具体的な評価手法については今後の検討課題である。

7. おわりに

3学部英語教育プログラムは、「異文化理解・受容を可能にする地球的視座で多文化共生の実現を目指す市民、ならびに本学の建学の精神に則り、グローバル社会で活躍できる職業人の育成に資する」ことを理念とし、「スキルの養成を行う一方で、教養教育・専門教育と関連を持たせながら、コンテンツを重視し、グローバル社会のなかで、市民・職業人として、他者の意見に耳を傾けながら、自らの意見・価値観を形成し、それを日本語・外国語で的確に発信することができる能力を養成する」ことを目的としている。これは語学教育検討委員会の答申（2005年1月28日付）に基づき、全学共通教育センターにおいて議論を重ねた結果の合意事項である。その当時に本学の将来を見据えて奔走された教員の多くは既に本学を去り、この数年で本プログラムを運営する教員は大きく入れ替わった。

今後新しい布陣による様々な斬新な取組が期待されるが、その際には、苦勞の末に現在のカリキュラムを立ち上げた先輩教員や、建学以来、英語教育重視の伝統を守り続けてくださった先人たちへの感謝の気持ちを決して忘れることなく、謙虚な気持ちで行動することが求められる。

時々の課題を地道に解決しつつ、常に時代の先端を行く英語教育プログラムを目指して研鑽を重ね日本の外国語教育の発展に寄与することが、今後我々に与えられた責務であると考ええる。

謝 辞

長年に亘って本学の英語教育を先導し 3 学部英語教育プログラムの立ち上げに邁進された、故野村啓治先生と、ご退官された寺地五一先生に本稿を捧げます。また、平成 21 年度「大学教育・学生支援推進事業【テーマ A】大学教育推進プログラム」の申請に際しご支援下さった皆様、また、これまで 3 学部英語プログラムを支えてくださったすべての皆様に心より感謝いたします。さらに、赴任初年度にも関わらず本プログラムの推進のためにご尽力くださった対馬輝昭、田中景画先生、経験不足の我々を常に支えてくださった大崎正瑠先生にも御礼申し上げます。

最後に、野村啓治先生。3 学部英語プログラムのまとめ役として、ご闘病中も最後まで我々のことを支えてくださりありがとうございました。先生からは本当に多くのことを学ばせていただきました。私の経験不足故、先生がお一人で背負っていた心労を軽減することができなかったことが悔やまれてなりません。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

注

- 1) 文部科学省中央教育審議会（2008）『学士課程教育の構築に向けて』を参照のこと。
- 2) 小田登志子・土屋園子（2009）「英語科目におけるオブザベーションウィーク（相互授業参観）の試み」『東京経済大学人文自然科学論集』No. 127, pp. 41-57 を参照のこと。
- 3) 藤田玲子・山形亜子・竹中肇子（2009）「学生の意識変化に見る英語プレゼンテーション授業の有用性」『東京経済大学人文自然科学論集』No. 128, pp. 35-54 を参照のこと。
- 4) Seki, S., & La Greca, J. (2009) Motivational and Attitudinal Factors Influencing English Study of Japanese Tertiary Level Students.『東京経済大学コミュニケーション科学』No. 31, pp 47-66. を参照のこと。
- 5) 関昭典・ジェイソン・ラ・グレカ（企画）（2008）『ALC NetAcademy ワークブック 基礎英語コースリーディング編』, アルク。を参照のこと。
- 6) 図 2 は、2009 年 5 月に本学学習アドバイザーである阿部真由美さんが実施したミニ講座のパンフレットである。
- 7) 寺地五一・野村啓治（2006）「東京経済大学 2006 年度英語新カリキュラム グローバル化時代と大学ユニバーサル化への対応」ALC NetAcademy ワークショップ口頭発表, アルク教育社。を参照のこと。
- 8) 文部科学省（1999）「高等学校学習指導要領 外国語編」を参照のこと。
- 9) 筆者は、2007 年度海外ゼミ研修（インド, 2007 年 9 月）。2008 年度 21 世紀教養プログラム「オフキャンパスプログラム」（インド・ネパール, 2008 年 9 月）。2008 年度海外ゼミ研修（ネパール, 2009 年 2 月）。2009 年度 21 世紀教養プログラム「オフキャンパスプログラム」（ネパール, 2009 年 9 月）を引率した。
- 10) 本学には「国際交流チューター制度」があり、学生が主体となり、外国人留学生への支援や日本人学生との交流行事などを企画運営している（年間予算 85 万円）。
- 11) 本学では 2009 年度より、TOEIC800 点以上で 6 単位, 650 点以上で 4 単位, 560 点以上で 2 単位, 470 点以上で 1 単位を授与する制度を導入した。

- (なお、TOEFLでは、88/230点以上で6単位、64/180点以上で4単位、54/157点以上で2単位、42/123点以上で1単位を授与する。)
- 12) 本学ではTOEIC900点以上を取得した学生にTKU進一層表彰制度の学長賞として50,000円、750点以上を取得した学生に30,000円、600点以上を取得した学生にTKU-ベルリッツ・プログラム運営委員長賞として図書カード5,000円を奨学金として授与している。
 - 13) Locke, E. A. (1996) *Motivation through Conscious Goal Setting*. *Applied & Preventive Psychology* 5, 1, 17-24. を参照のこと。
 - 14) 関昭典 (2006) 「動機づけ重視の英語学習モデルの構築とその効果の検証」『県立新潟女子短期大学研究紀要』第43号, pp129-141. を参照のこと。
 - 15) Seki, S., & La Greca, J. (2009) *Motivational and Attitudinal Factors Influencing English Study of Japanese Tertiary Level Students*. 『東京経済大学コミュニケーション科学』 No. 31, pp 47-66. を参照のこと。
 - 16) 道具的動機づけ、統合的動機づけの詳細については、Gardner, R., & Lambert, W. (1972) *Attitudes and Motivation in Second Language Learning*. Newbury House. を参照のこと。
 - 17) 中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて』(文部科学省, 2008) 第2章第1節では「多文化・異文化に関する知識の理解」「コミュニケーション・スキル」「生涯学習力」の3つの柱を目的に据えており、「英語アドバンストコース」の教育目標は本学のみならず他大学でも活用できる汎用性のあるものであると考える。
 - 18) 異文化リテラシー育成のための教育目標の設定について、本学英語専任教員の田中景氏と3学部英語プログラム特任講師である三宅ひろ子氏にご助言をいただいた。
 - 19) 本学21世紀教養プログラム所属学生と本学留学生の交流の場を設け、自発的な多文化交流のきっかけとする企画に、国際交流チューターも数多く参加した。本フォーラムでは、学生が進行役をつとめ、日本、韓国、中国等の学生がそれぞれ20分程度、自分の具体的な多文化交流体験を踏まえた問題提起を行ない、参加者相互の討論を行なった。
 - 20) 留学生として本学に入学するためには、本学での学業に支障のないレベルの日本語能が求められ、日本語(筆記・面接)を入試科目として課している。
 - 21) 過程志向モデルの詳細については、Dörnyei, Z. (2001b). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge University Press. (米山朝二・関昭典訳, 2005) 「動機づけを高める英語指導ストラテジー 35」大修館書店) を参照のこと。過程志向モデルでは外国語学習の動機づけを動的なものと捉え、特定の動機づけが学習期間中に不変的に存在するのではなく学習過程で変動すると指摘する。そして、学習過程を学習前、学習中、学習後の三段階に分け、各段階に必要とされる動機づけの指導法を列挙している。
 - 22) 自らの行動や感情を適切に制御しながら学習を進めていく能力を指す。自己調整学習の詳細については、Zimmerman, J. B., & Schunk, H. D. (1998) *Self-Regulated Learning: From Teaching to Self-Reflective Practice*. Guilford Press. 及び Zimmerman, J. B., & Schunk, H. D. (2001) *Self-Regulated Learning and Academic Achievement*. Lawrence Erlbaum Association. を参照のこと。
 - 23) 他者の学習行動を観察から学習法を学ぶことを言う。観察学習の詳細については Bandura, A. (1986) *Social Foundations of Thought and Action: A Social Cognitive Theory*. Prentice Hall. 及び Bandura, A. (1992) Exercise of Personal Agency through the Self-efficacy Mechanism. in Schwarzer, R. (eds.) *Self-efficacy: Thought control of action*. Hemisphere Pub, 3-38. を参照のこと。

と。

- 24) 他の学習者との（競争的でなく）協同的な環境下での学習形態を言う。協働学習の詳細については Wlodkowski, J. R. (1978) *Motivation and Teaching: A Practical Guide*. Washington, D. C.: National Education Association. 及び Little, D. (1997) *Autonomy and self-access in second language learning: Some fundamental issues in theory and practice*. in Müller-Verweyen, M. (eds.) *New development in foreign language learning: self-management — autonomy. Standpunkte zur Sprach- und Kulturvermittlung 7*: Munich. Goethe Institute, pp33-44. を参照のこと。また、協同学習の実践例については関昭典（2003）「自律した英語学習者の育成を目指したプロジェクトー 自律学習、英語学習量、英語運用能力の関係を探る —」『コミュニケーション・ティーチング研究会紀要』第 8 号 pp 7-25 を参照のこと。
- 25) 英語学習アドバイザー資格認定制度。適切・的確な英語アドバイスと学習者に応じたカウンセリング・メンタリングができる、プロの英語学習アドバイザーを養成・認定することを目的とした資格制度。資格は、英語力およびアドバイス力などにより、ジュニアからマスターまでの 4 段階で認定される。ESAC の詳細については http://www.alc.co.jp/event/esac/esac_2_080620.pdf を参照のこと。
- 26) 図 11. 英語セルフアクセスルームのモデルは本学専任教員である対馬輝昭氏に作成していただいた。
- 27) TSST (Telephone Standard Speaking Test) の詳細については、<http://tsst.alc.co.jp/> を参照のこと。
- 28) 異文化リテラシーの観点別評価項目については、本学英語専任教員の田中景氏に作成していただいた。

参 考 文 献

- 小田登志子・土屋園子（2009）「英語科目におけるオブザベーションウィーク（相互授業参観）の試み」『東京経済大学人文自然科学論集』No. 127, pp. 41-57
- 関昭典（2003）「自律した英語学習者の育成を目指したプロジェクトー自律学習、英語学習量、英語運用能力の関係を探る—」『コミュニケーション・ティーチング研究会紀要』第 8 号 pp 7-25
- 関昭典（2006）「動機づけ重視の英語学習モデルの構築とその効果の検証」『県立新潟女子短期大学研究紀要』第 43 号, pp 129-141.
- 関昭典・ジェイソン・ラ・グレカ（企画）（2008）『ALC NetAcademy ワークブック 基礎英語コースリーディング編』, アルク
- 文部科学省中央教育審議会（2008）『学士課程教育の構築に向けて』
- 寺地五一・野村啓治（2006）「東京経済大学 2006 年度英語新カリキュラム グローバル化時代と大学ユニバーサル化への対応」ALC NetAcademy ワークショップ口頭発表, アルク教育社
- 藤田玲子・山形亜子・竹中肇子（2009）「学生の意識変化に見る英語プレゼンテーション授業の有有用性」『東京経済大学人文自然科学論集』No. 128, pp. 35-54
- 文部科学省（1999）「高等学校学習指導要領 外国語編」
- Bandura, A. (1986) *Social Foundations of Thought and Action: A Social Cognitive Theory*. Prentice Hall.
- Bandura, A. (1992) Exercise of Personal Agency through the Self-efficacy Mechanism. in Schwarzer,

- R. (eds.) *Self-efficacy: Thought control of action*. Hemisphere Pub, 3-38.
- Dörnyei, Z. (2001a) *Teaching and Researching Motivation*. Pearson Education.
- Dörnyei, Z. (2001b). *Motivational Strategies in the Language Classroom*. Cambridge University Press.
- (米山朝二・関昭典訳 (2005) 「動機づけを高める英語指導ストラテジー 35」大修館書店)
- Gardner, R., & Lambert, W. (1972) *Attitudes and Motivation in Second Language Learning*. Newbury House.
- Little, D. (1997) Autonomy and self-access in second language learning: Some fundamental issues in theory and practice. in Müller-Verweyen, M. (eds.) *New development in foreign language learning: self-management — autonomy*. *Standpunkte zur Sprach- und Kulturvermittlung* 7: Munich. Goethe Institute, pp 33-44.
- Locke, E. A. (1996) Motivation through Conscious Goal Setting. *Applied & Preventive Psychology* 5, 1, 17-24.
- Seki, S., & La Greca, J. (2009) Motivational and Attitudinal Factors Influencing English Study of Japanese Tertiary Level Students. 『東京経済大学コミュニケーション科学』 No. 31, pp 47-66.
- Wlodkowski, J. R. (1978) *Motivation and Teaching: A Practical Guide*. Washington, D. C: National Education Association.
- Zimmerman, J. B., & Schunk, H. D. (1998) *Self-Regulated Learning: From Teaching to Self-Reflective Practice*. Guilford Press.
- Zimmerman, J. B., & Schunk, H. D. (2001) *Self-Regulated Learning and Academic Achievement*. Lawrence Erlbaum Association.

本稿は2008年度東京経済大学個人研究助成費による研究成果の一部である。